
かくれんぼ

K I D

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かくれんぼ

【Nコード】

N7993K

【作者名】

KID

【あらすじ】

俺・蘭・服部・和葉・快斗・青子の6人は、偶々秋祭りの帰りに立ち寄ったお寺で、ある『子供遊び』を行った。本当にただの遊びだけど、そこでは絶対にやってはいけない『遊び』があったんだ・。GARNET CROWのアルバム曲『かくれんぼ』を聴いて、思いついた短編です。なんです、季節が『秋』なのと『短編』にしてはかなり長い話になってしまいました（汗）ホラー系です、ので、気になった方は読んでみてください！

（前書き）

ホラー系のものは初めてなので、上手く出来たかどうか分からないのですが・・・。

とりあえず読んでみてください。

（かなり長くなってしまった・・・（ガクッ））

「ジャン・・・、ケン・・・、ポン！」

秋の風が吹くお寺で、皆は鬼を決めていた。

メンツはいつもの俺、蘭、服部、和葉、快斗、青子の6人。

それで何故お寺に居るのかと言うと、偶々通り掛かっただけ・・・。
そこで女子3人が『ちよつと寄って行かない？』と言って、皆で行く事になったのだ。

この日は皆、揃いも揃って着物姿・・・。

まあ・・・、秋祭りの後だったのだけれど・・・。

ちなみに、どういう下りで『かくれんぼ』をする事になったのかは、正直言つて覚えていない。

ただ何となく、蘭か和葉辺りが『少し子供の頃にやった遊びでもやるうよ』と言って、それで決まった気がする。

だけど個人的には乗れる気がしない。

ガキっぽ過ぎてしょうがない。

それに、ここに来る途中で、偶々すれ違った人が言っていた。

この場所では、ある遊びをしてはいけない、と・・・。

理由こそ忘れたが、何かマズい事が起こると言い伝えられているらしい。

まあ・・・『かくれんぼ』は対象にはなっていないだろう。

なっているとすれば『かごめ』とか・・・。

もつとも、どちらにしても、俺は信じないが・・・。
で・・・、先ほどのジャンケンの結果だが・・・。

「えっ・・・」

「あつ！ 新一が鬼！」

「新一もパー出せばよかったのに・・・」

快斗の言う通り、俺以外は全員パーで、俺だけグー。

きれいに俺だけグーだったのだ。

よくあれだけの人数だったにも関わらず、一発で決まったものだと思う。

「でもそんな事言ったら、鬼がいつまで経っても決まんないよ！」

「そなら工藤、俺ら適当に隠れとるで！」

「早めに見つけてや！」

「はいはい・・・」

と、俺は気がダルそうに答え、寺の中にあつた大きな杉の木の幹に、顔を押し当てた。

『確か「10秒」だったよな?』と思いながら・・・。

全く・・・。

快斗も服部も嫌がるかと思ったら、服部は『懐かしいなア』って言うし、快斗は快斗で『隠れるのだったなら蘭にも負けないぜ』って、強がるし・・・。

でもまあ・・・。

隠れるのが苦手な俺が鬼なら、それはそれでいいが・・・。

「いち……。に……。さん……」

ザワザワと風に吹かれて鳴る木々の間を、俺の声は通り過ぎていく。気が付けば自分の足元は落ち葉だらけだ。それにも構わずに、俺は数を数える。

「しち……。はち……」

『……。……。いち……。……。』

えっ……。？

と、全く別の数字が、全く別の声が、俺の後ろから聞こえてきた。ここで振り返っていいものかとも思ったが、まだ皆が隠れている途中というのもあり、見られたら絶対に大ブーイングが起こるに決まってる。

それに、大体その声の主のは分かっていた……。

（快斗だな……。あのヤロオ……。隠れられる場所が見つからねえからって、秒数紛らわすなよ……）

俺は杉の木に頭を押し付けたまま、後ろに居るであろう快斗に叫ぶ。

「快斗ーっ！ 秒数を紛らわすな！ セコいぞ！！ きゅう……。じゅう！！ もういいかー？」

流石に『もういいかい』なんて、ガキらしい言葉は言えない……。俺が皆に訊くと『もういいよーっ！』という返事が返ってきた。

それを聞いて、俺はやつと正面を向く。

当たり前の事だが、快斗はそこにはいなかった。

まあ、普通声を出した張本人が目の前にいるわけがない。

ましてやかくれんぼ中なのだから・・・。

俺は早速皆を探す為、寺中を歩き回る事にした。

ここで言うておくが、俺は隠れるのは苦手だが、見つけるのは得意だ。

逃げ隠れが嫌いなんですね・・・。

とはいえ、やはり秋の色に変わったお寺の姿には、ついつい目を奪われてしまう。

このまま・・・、紅葉でも見ていようか・・・。

そう何度も俺は思ってしまった。

その時。

ガサツ・・・

と、誰かが落ち葉を踏む音を立てた。

『そこにいるな』と思い、俺はお寺の左側に植えてあった杉の木の裏に回る。

だが、人の姿はない。

「おっかしいなあ・・・。確かに足音がしたんだけど・・・。」

そう思った時だ。

ピリリリ・・・

突然携帯電話が鳴り出し、俺は弾かれたようにポケットに手を突っ込んだ。

「電話か・・・か、快斗っ!？」

電話の主は、事もあるうちに快斗からである。

「かくれんぼ中に電話掛ける馬鹿が居るかよ・・・。もしもし？快斗？」

ザー・・・ザー・・・

聞こえてくるのはノイズばかり・・・。
快斗の声は聞こえてこない。

「快斗ー？ 出ないなら切んぞー？」
俺が電話を切ろうとした、その時だ。

『・・・く・・・な・・・!・・・し・・・ち・・・
・・・た・・・て・・・』

「あっ？ 聞こえねえよ、快斗。もっとハッキリ言えって」
微かに聞こえてくる快斗の声。
だが、ノイズが酷くて全く聞き取れない。
そうこうしている内に・・・。

そんなはずはない・・・！
ノイズが凄かったが、快斗は何かに向かって叫んでいた。
静かな筈はないのに・・・。

「和葉ちゃん！ 一旦くれんぼ中止だ！！ 皆にもそう伝えてくれ！ 快斗が居なくなっただって！！」

『うん！ あっ・・・、待って・・・。工藤君、こっちに誰か来るわ。足音聞こえる・・・』

「あ、足音・・・？」

『多分蘭ちゃんか青子ちゃんやと思う。うち、行ってくるわ』

「あ・・・、ああ・・・。頼む」

俺は和葉に女子組を任せ、俺は残っている服部に電話を掛けた。

一方の服部は、電話に出るや否や『見つけれへんからって、携帯電話使うのは卑怯やぞオ』と、全くこっちの話に耳を貸そうとせず、こちらの言い分を信じてくれるまでかなり掛かった。

『ホンマか！？ それ？』

「ああ・・・。携帯だけ落ちてたんだってさ・・・。服部、俺は寺の前の方の杉の木に居るから、すぐにこっちに来てくんねえか？」

『あ、ああ・・・』

そう服部が返事を返し、電話を切ろうとした時だ。

「きゃあああああああーっ！！！！！！」

まるで夕焼け空に広がるかのような悲鳴が、辺り一面に響いた。
声からして、間違いなく和葉のものだ。

俺は嫌な予感がして、慌てて声した寺の裏側へと向かう。
そこで偶然にも、服部とバッタリ出くわした。

「はっ……、服部……!!」

「どないしたんや、工藤？ けつたいな顔しようてからに……」

「服部！ 今の悲鳴、聞いたか!？」

「悲鳴……？ 何の事や？」

「な、何言つてんだよ!？ 今聞こえただろ!？ 和葉ちゃんの……」

「ああ! 『和葉』言つたら、行く途中で拾うたんや……。これ……」

「えっ……?」

そう言つて服部が俺に見せてきたのは、お守りの付いた携帯電話と、黒い携帯電話……。

間違いなく、和葉と快斗のものだ。

なんでも、寺の裏の少し手前に落ちていたらしい。

そう言えば、和葉が『足音がする』と言っていた場所が、そっちの方だったような……。

「和葉の携帯や……。携帯落としてもたら、連絡取れへんちゆうに……」

「……。服部……。お前……。和葉ちゃんの悲鳴、聞いてないのか？」

「ん？ そう言えばお前、さっきも『悲鳴』って……。か、和葉に何かあつたんか!？」

「だ・か・ら! ついさつき聞こえただろ!？ 鼓膜が破れそうになるくらい、和葉ちゃんの悲鳴を!!」

「何も……。聞いてへんぞ……。静かだったやんか……。し……。静かだつて……。!？」

俺は服部の言葉を聞いて驚いた。
なんと『かくれんぼ』を開始してから、服部は誰の悲鳴も叫び声も聞いていないというのだ。

服部が隠れていたのは、お寺の右横の石燈籠の後ろ。

つまり、周りにはほとんど何も無いわけなのだから、声は聞こえる筈なのだ。

それなのに、何も聞いていないだなんて・・・。

「どないする・・・？」

「とりあえず・・・、二人で一緒に・・・。また居なくなると厄介だから、二人で探すぞ！？ 残りの二人！」

「あ・・・、ああ・・・」

俺の脳裏に、蘭の姿が一瞬過る。

大丈夫・・・。

蘭は『かくれんぼ』が得意だ・・・。

それに、お化けとか嫌いなんだから、下手に動いたりはしないだろう・・・。

「探すぞ、服部」

「ああ、分かった・・・」

二人はまず最初に、消えた二人が隠れていたであろう場所を探し回ったが、残念な事に、二人の姿はどこにもなかった。

何も落ちていないし、唯一見つけたものは、快斗がいたであろう場所の茂みの木々が、少し折れていた事だ。

仰け反って後ろにでも逃げたのだろうか・・・。

「それ以外にはないなあ・・・」

「ああ・・・。それに、こんだけ後ろと右側を探していないって事は・・・」

「残りの二人が隠れたんは左側やな・・・」

「ああ・・・。もし遊びだったら、和葉ちゃんや快斗もそこにいる・・・」

もつとも、俺は単なる遊びだとは、もう思っていないが・・・。

と、その時。

ガサ・・・

「ん？」

「足音？」

足音がしたのは、これから向かおうとしていたお寺の左側からだっ
た。

だが、寺の建物のせいで、左側はよく見えない。

「おーい！ 誰かおるんかー！」

服部が声を上げてみるが、反応はない。

「フン！ なるほど・・・。自分からは出てくる気はないっちゅう
事やな。そなら俺から行つたるで」

「服部！ 勝手に行くな！！ 止めとけて・・・」

「平気やて、工藤。なにビビって・・・。ん？」

「ど・・・、どうした・・・？」

左側にズカズカと入って行つた服部は、ふっと何かを拾い上げてい
た。

その姿を見て、気になった俺も後に続く。

いざ行ってみると、左側は人の気配が全くなかった。
ただその代わりに……。

「これ、中森の姉ちゃんの……」

「あつ！ 快斗があげてたバラだ!!」

それは、青子の右胸辺りに付けていたバラの花だった。

快斗がいつものマジックで出したモノを貰って、着物に付けていたのを、今頃になって思い出す。

「これがここに落ちとるちゅうことは……」

「……まさか……、青子ちゃんも……」

「工藤……、あと残つとるのは……」

「蘭……!」

俺は一目散に、左側の茂みを見渡したが、蘭の姿はどこにもない。
ここに隠れていないとすれば、一体何処に……。

「蘭……。蘭！ 蘭っ！ 何処だっ!! 返事しろ！ 蘭!!」

俺は寺の左側から入口近くに戻ると、蘭の名を何度も呼んだ。

「蘭っ！ 蘭っ!! 蘭ーっ!!」

ピリリリ……。ピリリリ……。

俺が必死に声を荒げたのと同時に、また自分の携帯電話が鳴り出す。
今度は服部からだ。

(そう言えばアイツ……。何処に行った……。！？)
いつの間にか、後ろにいた筈の服部の姿が消えていた。
慌てて辺りを見渡すが、服部の姿は何処にもない。

俺は早速、その電話に出た。

「服部！ 服部！！ 無事なのか！？ おい！ 返事しろ！！」

『工藤！ 騒ぎ過ぎやて！ 中森の姉ちゃん、工藤が動いたの見て、隠れる場所移動したんやと……。今俺の後ろにおるで』

「み……。見つかったのか！？」

俺が服部に尋ねたのと同時に、向こうの電話の奥で、何やらゴソゴソと音が聞こえてきた。

それと同時に、今の雰囲気似合わない能天気な声が、服部の携帯から響く。

『工藤君、どうしたの？ 服部君、いきなり工藤君が大声出すから、ビックリしてたよ？』

「あ……。青子ちゃん……。大丈夫？ 何ともない？」

『う、うん……。何ともないよ。もう、青子最悪！ バラの花落とすだなんて……。』

「ハハハ……。」

俺は苦笑いを浮かべながら、最初に数を数えていた杉の木に向かっていた足を、お寺の右側に戻す。

やや二人の居る場所から遠周りの方に出てしまったが、まあいいか・。。。

『あつ……。工藤、お前こっちに向こうとるんか？』

「ああ……。お前ら、この寺の右側の茂みにいるんだろ？」

『うん。でも工藤君。いきなり後ろから『ワッ！』とかやらないでよ。青子そういうの苦手なんだから』

『アホ！ そういうのは黒羽がようやるもんや。そやけどホンマにアイツ……。一体何処に行ってんやろ……。』

ふっと、青子の会話を聞いて、俺は嫌な予感がした。

「……。お……。おい！ 服部！！ お前、どっちから足音がするって……。」

『えっ？ 後ろやけど……。』

今俺が向かっている方角は、寺の入り口から右側に反時計周りで向かう方法……。

つまり、もしあの二人がこっちに向かっているのだとすれば、足音がするのは後ろではなく前方。前方の筈なのだ。

それが、後ろから足音……。

やっぱり……。俺達以外に誰がいる……。！！

「服部！！ 青子ちゃん！！ そっちに行っちゃダメだ！！ そっちに行ったら……。」

『く……。う……。よ……。こ……。え……。ん』

その瞬間、激しいノイズが起こり、服部と青子の声が聞こえにくくなった。

俺の額に、冷や汗が流れる。

と、次の瞬間。

『うわっ・・・・・・・・こっ・・・・・・・・くん・・・・・・・・』

『・・・・・・・・きゃ・・・・・・・・あっ・・・・・・・・ち・・・・・・・・ぎゃ・・・・・・・・』

「服部！！ 青子ちゃん！！」

『・・・・・・・・きゃ・・・・・・・・こ・・・・・・・・ど・・・・・・・・も・・・・・・・・』

こども・・・・？

青子のそれを聞き取った瞬間、電話は切れた。

慌てて二人がいた場所に行ってみたが、やはり二人の姿はなく、服部の携帯電話だけが、寂しく残されているだけだった。

「服部・・・・。青子ちゃん・・・・」

あまりにも一瞬の出来事に、俺はその場で、まるで石のように固まった。

でもここまできて、ある程度の事が分かったような気がする。

まず、必ず消えてしまう人間で、消える間に携帯電話を触っていた人間は、携帯電話を残して消える。

そして、誰かが消える間に聞こえるはずの悲鳴や叫び声は、俺以外の人間は聞く事が出来ない。

そして何より、犯人は子供・・・・。

それかなり小さな・・・。

おそらく俺が皆を探している時に聞いた足音は、その犯人のものだろう。

そして、あの数を紛らわしたのも、今思えば・・・。

「蘭・・・。何処にいるんだ・・・。」

あと消えていないのは、蘭だけ・・・。

蘭だけの筈だ・・・。

何故なら・・・。

蘭だけが未だ、消えた痕跡が残っていないから・・・。

俺は持っていた携帯の電話帳から『毛利蘭』と映された画面を開き、蘭に電話を掛ける。

何回もなるコール音が、更なる不安を仰いだ。

（蘭、頼む！ 出てくれ・・・！）

ガチャッ

俺の想いが通じたのか、蘭は素直に電話に出た。

『もしもし？ 新一？』

「蘭っ！ 蘭っ！ 無事なのか！？ 大丈夫なのかっ！？」

『ど、どうしたの、新一？ そんなに慌てて……。それに今かくれんぼ中だよ？』

「蘭、落ち着いて聞いてくれ……。実は、皆がかくれんぼの途中で、消えっちまったんだ……。」

それを聞いた瞬間、向こうの電話の空気が変わった。蘭の声が、少し不安げになる。

『どういう事……。？ 新一が言ってる意味……。分かんないよ？』

「だから蘭。今からお前が隠れているところに、俺がすぐに行くから」

『待つて！ だったら、皆を探そうよ！ きつとどこかに……。』
「ダメだ！！ 蘭っ！！ そこから動くな！」

今ここで動いたら、きっと蘭も消される。

あの4人と同じように……。

『し……。新一……。』

「心配すんな。絶対に助けてやるからな！ お前、今どこに隠れている？」

『大きな杉の木の……。後ろ……。新一がさっきまで、数数えてたところ……。』

それを聞いて、俺は『大したもんだ』と思った。

よりもよって、鬼の数えていた木の後ろに隠れていたとは……。この時点で『隠れるのは負けない』と言っていた快斗は、明らかに負けている。

「あの木の後ろか……。待つてろ、すぐに行くからな。それと、

絶対に木の幹に顔を押し当てて、何も見ないようにしろ。ただし、携帯は切んな。それから・・・、足音や声がしても、絶対にそこを動くなよ？ いいな！？」

『う・・・、うん・・・』

わずか自分の立っている場所から10メートルしか離れていないと言うのに、ここまで蘭に念を押さなければいけないとは・・・。

ふっと、俺はここで初めて、あのすれ違った人が言っていた言葉を思い出した。

この場所で絶対にしてはいけない遊び・・・。

それが今になって『かくれんぼ』であると気がついた。

でも、何故かくれんぼがダメなのだろう・・・。

確かに子供遊び』としては、少々不気味な風情はあるが、そこまで禁断の遊びとは思えない。

それに、たとえそう言われていたとしても、それは迷信の筈・・・。
ならば、皆は何処に消えてしまったのだろう・・・。

それに、青子が電話が切れる途中で言った言葉・・・。

「子供・・・。子供が何をするって・・・。」

『・・・えっ・・・？』

「あつ、何でもない。こつちの話・・・。蘭、まだそこにいるか？」

『うん。居るよ・・・』

「すぐ行つてやるからな。待ってる」

俺は小走りで、蘭の隠れている木の傍へと向かった。

ここまでくれば、何も起こらない・・・。

木が見える位置まで来た俺は、油断した。

『あつ！ 足音・・・』

「！！ 蘭！ 動いちゃダメだ！！ すぐに行くから！」

『・・・あれ・・・？』

「蘭っ！ どうした！？ 蘭っ！！」

いきなり蘭の声が携帯から遠ざかり、俺は焦った。

焦って、焦って、携帯に向かって、何度も蘭の名を呼んだ。

だが、携帯はいつの間にかあの時と同じノイズが起こり、全くと言っていいほど聞き取れない。

俺は全力疾走で、杉の木に向かった。

そして、あとその木まで一歩というところで、電話から最後に聞こえた蘭の声・・・。

『・・・コナン君・・・？・・・』

えっ・・・？

その瞬間、電話が切れた。

「蘭っ！　おい！　おい、蘭っ！！　蘭っ！！」

俺が木の後ろに行ってみると、寂しく携帯電話だけがポツンと残されていた。

言うまでもなく、蘭の・・・。

「蘭・・・。お前まで・・・。」

俺は力尽きたように、その場に膝をついた。

必ず助けるって・・・。

心配すんなって・・・。

そう言ったのに・・・。

言ったのに俺は・・・。

俺は、落ち葉の上に落ちていた蘭の携帯を握り締めると、そのまま寺の真ん中に立ち、寺全体に向かって声を張り上げた。

「誰だ・・・。誰だ！　出てこい！！　皆を何処に消した！？　隠れてないで出てこい！！」

俺が声を張り上げたのと同時に『ザザザー』と、草木が秋の風にな

びき、空高く、カラスの高笑いが響く。
ふっと、俺は寺の入り口にあった石段の文字を見て、そこで凍りついた。

この寺の名前は『げんようじ幻妖寺』……。

名前の由来は、幻覚が妖となつて蠢く寺……。
そして、ここでよく聞いていた言葉は……。

『ここで《かくれんぼ》をすると、その人達の肉体と魂を奪い、妖が完全な人間になってしまう』というもの……。

隠れた者は魂を……。
鬼になった者は、最後に肉体を取られる……。

そして、一度始めたら、二度と鳥居より外には出られない……。

「ま……、まさか……な……」
今頃になつて思い出した名神を、俺は『そんなはずがない』と首を横に振りながら、鳥居の外に出ようとした。

が、何故か外に出られない。

まるで、見えない壁がここにあるかのようだ。

「そんな・・・。どうして・・・？」

いくら足を前に出しても、出られない。

「ど・・・、どうして・・・！？　なんで出れないんだ！！」

ピリリリ・・・　ピリリリ・・・

ふっと、ポケットの中で再び鳴り出した携帯電話に、俺は恐る恐る手を伸ばす。

電話を掛けられる人間は、もう居ないはずなのに・・・。

画面にはハッキリと『非通知』の文字が出ていた。
どうしようか迷って、電話に出る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・もしもし・・・？・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・もういいかい？・・・・・・・・・・・・・・・・』

その声に、俺は身を強張らせる。

体の中に流れている血が、サアと引いた。

そしてその声は、驚くほど幼く、そして、聞き覚えのある声・・・。

「誰なんだ……？」

『……まだだよ……』

「一体……。お前は……」

『……もういいかい？……』

「誰なんだっ！？」

『……もういいよ』

今ハッキリと、後ろで聞こえた……。

俺の後ろに……。皆を消した……。奴がいる……！

俺はゆっくりと、まるで映画のスローモーションのように、ゆっくりと後ろを振り返った。

そして、その光景に俺は目を見開く。

そこにいたのは・・・、俺・・・。
幼い時の・・・いや・・・。

あの時の・・・、俺・・・。

驚きのあまり声も出せなくなった俺に、ソイツはにやりと不気味に笑いながら、口を開いた。

『みーつけた』

静かなお寺の中を、彼は歩いていった。
色とりどりの落ち葉が舞う道は、本当にきれいだ。

人間的体になつて辺りを見渡すのは、約3年ぶり……。
彼が元の姿に戻ったが為に『江戸川コナン』として生きてきた僕の
魂は、どこにも行き場がなかった。

だから、この寺にひっそりと隠れていたのだ。

誰かが《かくれんぼ》をして、僕に肉体と魂を空け渡してくれるの
を待ちながら……。
そして、その時は3年後の今日、やってきた。

しかも、僕自身の人間を連れて……。
それも、彼がこの『工藤新一』という名の肉体を、渡す側となつて
……。

今『工藤新一』という体を手に入れた僕は、特に欲しいものなんて
何もない。
この寺からも出られる。
ならば……、まあ、彼の昔の家で、またひっそりと暮らそうか……。

それにしても、彼らも無用心すぎる……。
こちらを見なければ、魂を盗まれる事も、肉体を取られる事もなかつたのに……。

回避法を知らないから、こういう事になるのだ。
僕だって知っているというのに……。

でも、そんなヒント、僕が知っていて教えるわけがない。
だって教えたら、人間として生きていけないでしょ？

ああ、そうさ！
僕は卑怯だよ！

だって……。

《鬼ですから……》

（後書き）

どーも K I Dでーす!!

別の名前で小説を書き始めたというのもあり、短編を一つ載せました！

（あともう一つ、書こうと思っています）

今回は、話が長すぎ!!

一度は『前編』『後編』で分けようとしたんですけど、全部載せる方に決めました・・・（ハァー）

ちなみに、GARNET CROWの『かくれんぼ』は、私のイメージで作ったこの話よりも、かなり歌詞が怖いです。

読んでくださった人は是非一度、聴いてみてください。

確か・・・『THE TWILIGHT VALLEY』だったかな？

（アルバムタイトル・・・）

つづり間違ってたらゴメンナサイm（ ）m（ペコリ）

それでは シ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7993k/>

かくれんぼ

2011年11月11日21時44分発行